

B.マンデルブロは『フラクタル幾何学』（広中平祐監訳、1985年、日経サイエンス社）の巻末、歴史的概観の章の書き出しで、「建物が完成した後には、足場の跡を目にすることはできない」というガウスの言葉を引用した。

人の一次引用文を再度引用することは、文字通り最も恥じるべき愚かな行為であると、山田先生から一度厳しい指摘を頂いていた。しかし、このガウスの言葉だけは、それを讀んだ時以来、私の脳裏から片時も離れなかった（筆者の勉強不足で未だ原本の発見には至っていない）。

しかし何故か、私は、この書物を手にすると、どうしてもこの章を開き、この言葉を見てしまうと、その向こう側にいつも山田盛太郎著『日本資本主義分析』の影が見えてしまうのだ。

周知のように、所謂『分析』は、出版以来、難解をもって鳴り、成立の段階から、その解釈には様々な対立や論争が付き纏わり、つまらない御託や学問的に不毛な議論が飛び交った。

大橋隆憲氏と北村貞夫氏からそれぞれ前後して呼び出しがあり、そこで山田先生の諸事項についての整理は君が必ずやるようにとのご指示があり、程なく両先生共に亡くなられてしまった。その後、龍谷大学には山田先生の蔵書が運び込まれてきたが、当初は整理のため、なかなか触ることが出来なかったし、書物の整理は彼らの方が上手いので任せていました。

ある日、図書館の管理職から、山田文庫には書籍以外に種々のペーパー類があり、整理したのだけれど、最終的にはこれをどう扱ったら良いのか困惑しているので、意見と指示を聞かせてほしいとの問い合わせがあった。

これらは段ボール箱7箱に入れられ搬入されたもので、雑誌・紀要等からの抜粋が主体で、いちおう塵は取られてはいたが、長期間、山田先生の書斎に保管されていたことが見て取れた。抜粋以外には、地図と手作りの統計表や様々な紙片類が無造作に存在し、抜粋論考は図書館職員により五十音順に並べられて、いちおうの整理がなされてはいたが、幾つかの問題が発生していた。

ここから、これらの紙片類を手始めとした山田文庫への困難な調査が始まりました。これら附属資料から次々に見つかったのは、山田『分析』、並びに、山田経済学の足場であり、作業の痕跡の山でした。こんなわけで、マンデルブロの引用が絶えず私に付き纏うことになったのです。

本日は、このようにして開始された山田文庫に対する吟味のなかで、とりわけ私が附属資料と名付けた例の7つの箱の資料群について若干の話をさせていただくことで、山田盛太郎研究を指向される研究者の方々に対しての報告とさせていただきます。報告の軸としては奥山清太郎氏による「第二外国語経済学 山田助教授口述」、「附属資料・映像索引一覧」、と小生が複製した山田先生の読書痕（『日本資本主義分析』三冊、『再生産過程プロセス序論』、野呂榮太郎、井上晴丸、土屋喬夫、等々）がある書物に若干の話を交え、大項目としては下記の論題に沿って進めたい。

一）蔵書・保管書類から見た山田盛太郎氏

丹念さ、細心さと大胆さ。良く無事に残されたと感謝する先生の蔵書。記録を取り、整理する山田先生。メモ類に於いても常に全体を鳥瞰する視角。削除部分への目配り。河上先生への代わらぬ敬意。『経済評論』は当然としても東大の『経済学論集』よりも『経済論叢』『経済学雑誌』。重要であると感じた場合には例え些事であっても絶対に手を抜かない山田先生。

二) アカデミックデー通じて知る山田盛太郎氏

山田先生にとって重要であった「アカデミックデー」。山田先生にとってのダビンチ、ベートーベン。「アンギアーリ」ではなく「最後の晚餐」が指し示すもの。デューラーやナチスレジームが何故面白い対象ではないのか。小生の心にムクムクと押さえても出てくる人間の行為の問題。大橋隆憲先生が抱えた問題点。

三) 学問への姿勢、余白の中身を問う

表現とはどのようなことなのか、表現の手段と受け手(読み手)が意識しなければならないこと。余白がもつ重大な意味。文字以外の表現形態と山田先生。絵画・音楽・小説等々。

四) 多くの可能性を読み解く

後学は必ず先学を抜く意思を常々もつことの意味。他方で、先学が残した学問的遺産への敬意。山田先生の興奮と溜息。

「中塚君よ、天と地の間には、お前の哲学では思いもよらない出来事が、まだまだあるぞ！」

「力尽きて溺れるまで、向こう岸を目指して死に物狂いで泳ごう！向こう岸に手が着くと、楽しいぞ！」「楽しい学問をしよう！」「学問に取り組んでいると、こんなに楽しいことが他にあるものか！と思えるときがある。」

「自分よりももっと悪い条件であっても、愚痴も言わずに嬉嬉として物事に当たっている人がいるぞ、苦しいときにはそういう人のことを思うと、気持ちが落ち着くものだ。」

蛇足ではありますが、昔話をされる山田先生から、何度もお聞きしたことで特徴的なものに、「昔は、一日学問を休むと日本の学問が一日遅れる、とって、あの時は本当によく勉強したものだ・・・」と言う話であったり、「いいですか、学問をする者にとって、学問をするということは使命としてやるものであって、職業として関わるものではありません」というものであった。

もう一つ蛇足を加えさせていただくと、

ある日、相沢義包、富岡倍雄、廣松渉、村尾行一氏らによる『深夜討論 知識人の虚像と実像』(亜紀書房、1970)を読んでいると、p.49で廣松氏は「・・・明治時代の学者は、おれが一日遊んだら日本の学問は一日おくれる・・・」という話をされ、昔の人は本当によく勉強したんだと・・・。

ついでにもう一つ引用しておく、特徴的な文章表現をされる廣松氏は、文章の表現方法についても「最後に文体や表現のことに關して是非一言しておきたい。筆者は平常いわゆる六三型の文章はかかないで、和歌混淆文に拠っている。旧仮名を用いることはもちろんのことである。これは趣味の問題ではなくて、ちゃんとそれ相応の理由あつての話である。この点に關する筆者の主張は文化政策一般に關連するのでここで喋口するのは差し控えるが、書肆の強い要望によって、今回はのろうべき愚民政策の片棒をかついで、真文字を仮名にあらためたばかりか文体もあらためた。」『日本の学生運動—その理論—と歴史—』東大学生運動研究会(新興出版社、1956)筆者の門松暁鐘氏とは廣松渉氏のペンネーム)と若い時代に書かれておられるので、山田文庫には何等関わりが無いけれど、廣松氏を引用したついでに、面白くまた気に入っていた彼の文章を、今ではあまり知られていない書物なので、ついでにこれも参考に引用してみた。不悪！